

2024 年度全学 FD 学習会の振り返り

昨年、1 月 8 日に恒例の全学 FD 学習会が開催されました。「生成 AI と共生する授業デザインと評価」をテーマとして、教育工学を専門とする中央大学教育力研究開発機構の澁川幸加先生にご講演いただきました。その内容の一部を簡単に要約しました。

(1) ガイドラインや倫理綱領の策定

生成 AI の活用のための国際・国家レベルでのガイドラインや、各大学における倫理綱領の制定が進んでいる。剽窃や著作物の侵害、個人情報漏洩、学生自身の学びの進化に繋がらない利用といったリスクに留意しつつ、いかに AI を利活用するかという視点が重要と考えられる。

(2) 学生の生成 AI 利用率

生成 AI の一種である ChatGPT の学生の利用状況に関する全国調査（2023 年夏実施）では、32%の学生が利用したことがあり、かつ利用者の 9 割は知識を増やしたり、学びを深めたりするうえでプラスだと思うと回答していることが示された。

(3) 教育上の生成 AI 活用法

教員が授業づくりのために生成 AI を活用する方法として、①教材を作成する、②問題を作成する、③個別フィードバックに利用することがある。たとえば、教材の作成においては、授業の狙いを達成できるような Bad プラクティスのシナリオ（対話文）を作ることがある。その際には、条件も具体的に指定し指示することが求められる。このシナリオを使って、学生に問題点や改善案を考えさせるグループワークを実施することができる。

(4) 学習上の生成 AI 活用法

学生が、自らのよりよい学びのために生成 AI を活用する方法として、①メンター（フィードバックを得る）、②チューター（パーソナライズされた指導を受ける）、③コーチ（振り返りや計画立案を助けてもらう）、④チームメイト（代替的な視点を提供してもらう）、⑤学生（教える相手になってもらう）、⑥シミュレーター（練習相手になってもらう）、⑦ツール（作業の効率化を助けてもらう）としての利用が考えられる。具体的には、レポートの改善を見つけてもらったり、外国語の発音に対するフィードバックをもらったり、アイデアを出してもらったりすることが考えられる。

(5) 生成 AI を学生が利用する時代における評価方法

学生が生成 AI を利用する時代において、学力を評価するためには、以下の工夫が考えられる。①題材を工夫する（個人的な経験や視点を求める題材、文章以外の成果物を求めるなど）、②学習過程を重視した評価にする（レポートを評価し改善する活動を授業に取り入れてから評価する）、③評価機会を増やす（多様な評価を取り入れることで、生成 AI 頼りにならないようにする）ことである。

教育開発・学習支援室は、「たちばな教育サロン・セミナー」や、学生向けの学習支援セミナー「Tada Lab セミナー」を通じて、2025 年度より生成 AI を有効活用できる教育および学習の実現を支援してまいります。

「ICTを活用した授業づくり」

2024年11月13日に、本年度第2回目の「たちばな教育サロン」を対面とオンラインを同時に行うハイフレックス形式で開催し、22名(対面8名、オンライン14名)の方にご参加いただきました。以下は、当日のポイントをまとめたものです。報告動画やスライド資料は、[教育開発・学習支援室WEBサイト「学内FD関連動画」](#)からもご覧いただくことができます(パスワードはメール本文に記載させていただいております)。先生方の授業づくりの参考になれば幸いです。

報告1：オンデマンド型遠隔授業におけるミスマッチを防ぐための実践

日本語日本文学科 千々岩 宏晃先生

教養教育科目「言語コミュニケーション論」について紹介します。コロナ以降、フルオンデマンド授業として開講しています。この授業は、楽単科目(楽に単位が取れる科目)だと捉えられてしまっているようです。しかし、私は受講に覚悟を持ってほしいと考え、いくつかの工夫をしました。

はじめに、授業開始前に受講のルールをTeamsで配信することです。Teamsクラスが作成され次第、「毎回面倒くさいが、やれば役に立つ授業である」「毎回半数程度の学生が単位を落とす(昨年の単位取得率を明示)」「シラバスを必ず読むことを要求」「その他、授業受講上の留意事項」を説明する投稿を行い、本投稿を読んだらリアクションで反応するよう求めています。これをするだけで、初回講義時点で、履修登録者が450名から280名まで減り、マッチングができました。

授業では、講義内容を踏まえた自己省察課題を出し、匿名で紹介しつつ教員がコメントをする動画教材を毎週つくっています。この動画だけで30分程度になります。さらに、学生の到達度を中間地点で伝えています。毎回5点×14回=70点の小テストを実施していますが、5回目の時点での合計点数を踏まえ、このままの調子で学んだ場合の期末得点予測を学籍番号と合わせて授業内で公開するようにしています。ここから頑張ろうと切り替える学生もいますし、ここで単位取得を断念する学生もいます。

このように、授業者と受講者がコミュニケーションを取れるよう工夫することで、オンデマンドでありながらも互いに学び合える授業づくりを模索しています。

報告2：動画を活用した講義運営と反転授業の活用

経済学科 牧和生先生

経済学科1回生の必修科目「経済学入門Ⅱ」における授業改善の経緯をご紹介します。2021年の学科新設とともに始まったこの科目は、当初オンデマンド(遠隔)授業でした。耳の不自由な学生は講師の口元が見えると理解しやすくなるということで、板書を録画するスタイルで、情熱を込めて動画を作成しました。翌年は、学生の声を反映させて動画をさらにコンパクトにしたり、字幕を入れたりするなどの工夫をしました。

そして、2023年からは遠隔から対面授業になりました。せっかくこれまで作ってきた板書動画があるので、これを活用して反転授業にすることにしました。講義動画で予習をしてノートを作成してきてもらい、対面授業中は学生同士で教え合い、教員が補足するという授業設計です。しかし、板書動画は予習動画としては長すぎるため、45分版のスライド版動画も別に作成しました。現在は、スライド版動画(短い)を予習利用、板書動画(長い)を復習利用してもらえるようにしています。予習動画をきちんと視聴して講義に参加してもらえるよう、予習動画と課題を連動させるようにしたいです。視聴状況などを確認しますと、板書動画の方が視聴されており、優秀な学生ほどその傾向が強かったことは意外でした。

対面授業と動画教材を合わせて提供することは、対面授業時間内に全てを理解できなくても心配ないという安心感につながり、結果的に学習効果を高める効果があると実感しています。